若い時から自分の専属学会を大事にしよう

第14代会長　新名　惇彦

日本生物工学会は生物工学の学理の追求と応用を目指す者が集う集団である．本会の会員は通常，周辺の国内外のいくつかの学会員でもあるが，どの学会を主にするかは人それぞれである．若い会員にお願いしたいのは，主学会を大切にし，常に先輩，友人，後輩との繋がり広く深く求めて欲しい．科学の進歩が速くなり，境界領域もどんどん変化している．一人でできることには限りがある．いい友を沢山持つことが，その人の科学者，技術者人生に重要である．若い時に親しくなった仲間は大学，企業，あるいは国が違っても一生の財産になる．

具体的には，本会を主学会にしようとお考えの皆さんには，年次大会は勿論のこと，シンポジウムや支部の会合などにできるだけ参加して欲しい．それにより本会の仲間との繋がりが深くなる．

私は本会の創設に関わった大阪大学の照井堯造先生の指導を受け，学生のころから，ずっと日本醗酵工学会，日本生物工学会のメンバーとして多くの先輩，同僚，後輩，そして学会事務局の人達と親交を重ねてきた．幹事や理事も長年，務めさせていただいた．大会や懇親会に出れば多くの親しい人々に会えるのが大きな楽しみである．教えを請うこともある，情報を交換することもある，共同研究・共同プロジェクトに参加することも多い．これらは主たる学会のメンバー同士だからこそ敷居が低い．しかも本会には醸造製品という最大の潤滑剤があるのだから．

「縁のむこうに縁がある」という言葉がある．親しい人ができれば，その人のご縁でさらに親しくなれる人がいる，という意味である．私にとって幸運だったのは，若い時に米国MITのドメイン教授の研究室で過ごせたことである．教授は世界的な微生物の二次代謝の権威であり，大の親日家でもある．MITに居たのは1年だけであったが，教授を介して国内はもとより海外に多くの親友ができた．

若い人でも遠慮はいらない．一歩，前に出る気持ちが新たな仲間を増やすことになる．

さて，創立90周年を祝う事業の一環として，歴代会長が語るという企画なので，私が副会長，会長をしていたころのことを述べる．

1995年に児玉　徹 第11代会長が就任されたときに，私は副会長を仰せつかった．当時，南米ペルーはフジモリ大統領が2期目に入っていた．有富・駐日特命全権大使に東京のパーティーでお会いした．ペルーではバイオテクノロジー分野が遅れており，本会との交流のために視察を依頼された．翌年8月に児玉会長，東京理科学機器協会員と共に10日間，訪問した．海岸砂漠地帯，アンデス山岳地帯，アマゾンなど，気候帯，植物種は実に多様であった．ジャガイモ，トマトなどの栽培種のルーツであり，原品種も目にした．ジャングルの中に忽然と現れたマチュピチュ遺跡の印象は今も鮮明である．

2001年，谷　吉樹 第13代会長が就任されたときにもう一度，副会長を拝命した．この時は2002年の創立80周年記念事業が大変だったが，遣り甲斐もあった．高校生対象の懸賞論文を募集し，優秀賞の3名を翌年，私が会長の時にアメリカ視察に招待した．アメリカ大使館，農務省の支援もあり，アリゾナの遺伝子組換え農場を詳しく視察したが，若い諸君が遺伝子組換え植物の必要性を実感してくれたのが収穫であった．